礼拝説教（2020 年９月 13 日）

説教者：中村信哉

混乱の神ではなく、平和の神

コリント人への手紙第一 14 章 26-33 節

はじめに

私が月の第二週に説教をする時は、新約聖書からお話しています。そして少しずつ「コリント人への手紙第一」を学んでいます。「コリント人への手紙第一」の 12-14 章には、「御霊の賜物」について書かれています。

コリント教会では、賜物を巡って、混乱が起きていたようです。ある人たちが賜物の中でも、「異言」は最高のものだと考えて、皆に異言を語ることを求めたり、礼拝の中で無秩序に異言で祈ったり、賛美したりしていたようです。

使徒パウロは 12 章で、「御霊の賜物」には様々な種類があって、「異言」はその中の一つに過ぎないので、皆が「異言」を語らなくてもよいと教えています。13 章では、むしろ皆が求めるべき賜物は、「異言」ではなく「愛」であると教えています。そして 14 章では、「異言」と「預言」を比較して、「異言」よりも「預言」を求めているように教えています。

コリント教会のある人たちは、「異言」こそ最高の賜物だと考えていましたが、パウロは「異言」よりも「愛」や「預言」を求めるようにと教えているのです。

では、「異言」とは何でしょうか。「異言」は、誰にも理解できない言葉で、自分や神様に向かって奥義を語り、自分を成長させるものです。それに対して「預言」は、誰にでも理解できる言葉で、人に向かって育てることばや慰めや励ましを語り、教会を成長させるものです。「預言」は必ずしも未来のことを言い当てるものではなく、神様の言葉を預かるものです。神様の言葉を通して、人を育て、励まし、慰めを与えるものです。今で言えば、説教に当たると言えます。

「異言」は自分を成長させるもので、「預言」は教会を成長させるものです。コリント教会のある人たちは、自分の信仰の成長ばかりを求めていて、他の人に対する愛や配慮に欠けていたのです。また自分の信仰の成長ばかりを求めていて、教会全体の成長を考えることに欠けていたのです。そのためコリント教会の一致は乱れ、バラバラになっていたのです。

1. コリント教会の礼拝

今日の聖書箇所の 26 節には、こうあります。**「それでは、兄弟たち。どうすればよいのでしょう。あなたがたが集まるときには、それぞれが賛美したり、教えたり、啓示を告げたり、異言を話したり、解き明かしたりすることができます。そのすべてのことを、成長に役立てるためにしなさい」**。

ここには、「あなたがたが集まるとき」とあるように、コリント教会の礼拝の様子が書かれています。コリント教会の礼拝では、賛美、教え、啓示を告げる（預言）、異言、異言の

解き明かしなどが行われていたようです。

この部分はギリシヤ語の原文では、「賛美を持っている、教えを持っている、啓示を持っている、異言を持っている、解き明かしを持っている」となっています。これは、当時の礼拝では、それぞれの賜物を持ち寄って礼拝が成り立っていたということです。賛美の賜物、教えの賜物、預言の賜物、異言の賜物、解き明かしの賜物、それぞれが賜物を用いて、それを生かすことによって礼拝が成り立っていたのです。

礼拝とは、それぞれの賜物が生かされて成り立ちます。説教の賜物、祈りの賜物、奏楽の賜物、賛美の賜物、受付の賜物、掃除の賜物など。礼拝は、それぞれの賜物が生かされる場です。礼拝は、お客さんのように、ただ説教を聞きに来るものではありません。キリストのからだの一部である一人ひとりが、賜物を生かして造り上げていくものです。一人ひとりがしっかりと声を上げて讃美をすることによって礼拝が造られます。また一人ひとりが代表者の祈りに耳を傾けて「アーメン」と声を上げることによって礼拝が造られます。また一人ひとりが牧師の説教を真剣に聴くことによって牧師を励まし、牧師の説教を成長させます。

礼拝は、決して受け身であってはいけません。礼拝は、牧師や一部の奉仕者が造るものではありません。礼拝は、参加者全員が造り上げていくものなのです。

私たち一人ひとりに与えられた賜物は、皆の益となるために（12：7)、つまり教会の成長のため、教会をキリストのからだとして建て上げるために、イエス様あるいは聖霊によって与えられたものです。

しかしコリント教会では、「それぞれが賛美したり、教えたり、啓示を告げたり、異言を話したり、解き明かしをしたり」とあるように、それぞれが礼拝の中で、自由に賛美したり、教えたり、啓示を告げたり、異言を話したり、解き明かしたりしていたようです。それぞれが教会の成長のためではなく、自分の信仰の成長のために、自由に賛美し、自由に教え、自由に預言し、自由に異言を語り、自由に解き明かしをしていたので、礼拝は無秩序で混乱していたのです。

だからこそパウロは、「すべてのことを、成長に役立てるためにしなさい」と言って、それぞれの賜物を、自分の信仰の成長のためではなく、教会の成長のために、教会をキリストのからだとして建て上げるために用いなさいと教えているのです。

2. <u>異言で語る場合</u>

27-28 節でパウロは、礼拝での「異言」の用い方について具体的な指導をしています。**「だれかが異言で語るのであれば、二人か、多くても三人で順番に行い、一人が解き明かしをしなさい。解き明かす者がいなければ、教会では黙っていて、自分に対し、また神に対して語りなさい」**。

礼拝で「異言」を語る場合はまず、「二人か、多くても三人で順番に行い」なさいと言います。おそらくコリント教会の礼拝では、多くの人が一斉に「異言」を語っていたようです。それは、未信者が礼拝に来た時には、「気が変になっている」と思われるような光景でした。

そこでパウロは、異言を語る人を少人数に制限して、しかも一斉に語ることを禁じて、一

人ずつ順番に語るように命じています。

しかも礼拝では、必ず「異言」を解き明かす者を置くようにとしています。「異言」を解き明かす者がいなければ、教会では一切「異言」で語ることを禁じています。つまり「異言」を解き明かす者がいなければ、家で個人的に、自分と神様との関係の中で「異言」を語りなさいと言っています。

なぜパウロはこのように言うのでしょうか。それは、教会では「誰にでも理解できる言葉」を用いるべきだからです。「異言」は、「誰にも理解できない言葉」で、自分や神様に向かって語るものです。ですから「異言」は、解き明かす者がいて、「誰にでも理解できる言葉」とならない限り、教会の成長には役に立たないし、皆の益にもならないのです。

パウロは 14：19 で、**「教会では、異言で一万のことばを語るよりむしろ、ほかの人たちにも教えるために、私の知性で五つのことばを語りたいと思います」**と言っています。つまり教会では、「誰にも理解できない言葉」ではなく、「誰にでも理解できる言葉」を用いるべきなのです。「誰にも理解できない言葉」は、家で、自分と神様との間で用いるべきなのです。

私たちの教会の礼拝でも、「誰にでも理解できる言葉」が用いられなければなりません。説教も難しい内容や言葉ではなく、分かり易い内容や言葉で語られなければなりません。また牧会の祈りや献金の祈りも、はっきりとした言葉で、皆が「アーメン」と言える整えられた内容の祈りでなければなりません。また讃美も皆が理解できる歌詞の讃美歌でなければなりません。しかし私たちの教会が用いている韓日讃頌歌の歌詞は、古い日本語が遣われていて、ほとんどの人はその歌詞の 50%ぐらいしか正確な意味は分からないのではないかと思います。「誰にでも理解できる言葉」で神様を賛美するために、礼拝の讃美について考えていかなければなりません。

礼拝には、子どもからお年寄りまで、また日本人から外国人まで、障がいを抱えている方から健常者までが共に集まって、神様を礼拝します。そのみんなが「理解できる言葉」で心から神様を礼拝できる、そういう礼拝を私たちは求めていかなければなりません。決して自分の信仰の成長のためだけを考えるのではなく、教会全体の成長を考えていかなければなりません。そこには、他の人を思いやる愛が必要となり、自分の思いを少し犠牲にすることも必要となってくるのです。

3. <u>預言をする場合</u>

29-32 節でパウロは、今度は礼拝での「預言」の用い方についての指導をしています。**「預言する者たちも、二人か三人が語り、ほかの者たちはそれを吟味しなさい。席に着いている別の人に啓示が与えられたら、先に語っていた人は黙りなさい。だれでも学び、だれでも励ましが受けられるように、だれでも一人ずつ預言することができます。預言する者たちの霊は預言する者たちに従います」**。

礼拝で「預言」を語る場合も、「異言」と同じように、2～3 人の少人数で、順番で語るようにとパウロは命じています。「預言」の場合は、多くの人が一斉に語るのではなく、一人

の人が長々と語ってしまうという問題があったようです。

当時は、神様からの直接的な啓示があったようです。そしてその啓示を与えられた人が、皆の前でそれを語ったのでしょう。しかし私たち日本長老教会は、今ではそのような神様からの直接的な啓示は停止されていると理解しています。神様からの直接的な啓示はすべて、旧約聖書と新約聖書にまとめられているので、聖書が完結した時点で、神様からの直接的な啓示は停止されていると理解しているのです。ですから私たちは、神様の御心を求める時に、神様からの直接的な啓示を求めるのではなく、聖書の御言葉に求めなければなりません。そして聖書の御言葉を、自分が直面している具体的な問題に適用して、神様の御心は何かと祈りつつ考え、時には知恵のあるクリスチャンに相談し、選び取っていかなければなりません。

当時は、多くの人に神様からの直接的な啓示が与えられていたようですが、同時に「偽預言者」もたくさんいて、教会を惑わしていたようです。ですからパウロは、「ほかの者たちはそれを吟味しなさい」と言っているのです。教会は、その啓示が本当に神様からのものかどうかを「吟味する」必要があるのです。「吟味する」という言葉は、「疑う」とか「批判する」とも訳される言葉です。教会は、語られた啓示を無批判に鵜呑みにするのではなく、疑う心と批判的な心も持ちながら、聞く必要があるのです。

現代の礼拝では、神様からの直接的な啓示ではなく、聖書にまとめられ完結した神様の啓示を解き明かし、「説教」として語ります。説教を聞く人は皆、説教を吟味しなければなりません。決して鵜呑みにしたり、無批判に聞いてはなりません。いたずらに批判的になったり、疑いながら聞くのではなく、その説教が本当に聖書的かどうかを判断する力を持たなければなりません。また教理的に間違っていないかを判断しなければなりません。もし牧師の説教が聖書的、教理的に間違っているならば、それを指摘しなければなりません。そうでなければ、牧師の独壇場になり、教会は歪んでいきます。

信徒が、牧師が語る説教をよく吟味し、牧師も緊張感と恐れをもって、「誰にでも理解できる言葉」で、教理的に誤りのない聖書的な説教をする礼拝こそ、教会を成長させ、キリストのからだを建て上げる礼拝となるのではないでしょうか。

おわりに

33 節に、**「神は混乱の神ではなく、平和の神なのです」**とあります。神様は、混乱した無秩序な礼拝を望まれません。自分の信仰の成長だけを求めるバラバラの礼拝ではなく、それぞれが教会全体の成長のために、自分の賜物を用いていく礼拝を求めておられます。

神様は「平和の神」です。神様との平和があり、教会の兄弟姉妹との平和がある礼拝を求めておられるのです。自分と神様との関係だけでなく、教会の兄弟姉妹との関係も考えられた愛と思いやりのある礼拝、秩序が整った礼拝を求めておられるのです。

天におられる父なる神様。

私たちはイエス様を信じて新しく生まれ、永遠の命に生かされていますが、今もなお自己

中心という罪の性質を完全に拭えない存在です。そのため教会の礼拝やあらゆる活動の中にも自己中心が顔を出し、教会の一致を乱し、混乱を招く恐れがあります。どうか私たちが教会をキリストのからだとして建て上げるために、御言葉と御霊に教えられながら、自らを制し、教会の兄弟姉妹の益を考え、愛と思いやりをもっていくことができますように。

いつでもあなたが混乱の神ではなく、平和の神であることを心に刻んでいることができますように。

この祈りを教会のかしらイエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。